



たいしも通信

下関戦跡シリーズ6回目、下関要塞後編です。前回は前編として明治期まででしたが、後編ではその後の大正・昭和を経た現状までについて触れることとします。

◆明治末期の要塞整理

日露戦争終結後の明治38年(1905年)、全国の要塞の整理についての議論が始まり、大正から昭和初期にかけて多くの要塞の統廃合が行われました。下関要塞でも従来の関門防衛だけではなく、北部九州沿岸までカバーする防衛ラインの前進が検討されるとともに、豊後水道を守る豊予要塞設置が決定、その結果周防灘防御の必要性がなくなり、関連する砲台・堡壘(砲台防御用陣地)のほとんどが廃止されます。唯一、金比羅山堡壘は演習用砲台として昭和20年の終戦まで存続しました。実情は一時的にせよ周辺に大日本帝国を脅かす敵国がなくなったことから沿岸防備のニーズが激減し、加えて関東大震災に伴う修理費捻出のため、陸軍は要塞地帯を整理して不要用地を町村に払い下げることとしたようです。

◆昭和期の要塞再整理

昭和期に入っても要塞整理の議論は続きましたが、昭和6年(1931年)の満州事変以後、中国だけではなくソ連とも緊張状態が高まってきました。本土と大陸間の往来は軍の行動を含め、あらゆるものが対馬海峡を通らなければならなかったため、新たな防衛ラインを構築する必要があります。そこで昭和9年(1934年)に要塞再整理が発布され、下関要塞は朝鮮海峡要塞系(鎮海湾(金山)、対馬、杵岐、下関)の一部となり、下関要塞領域の各島嶼に砲台が設置されることになりました。以下、新たに築城された砲台です。

①蓋井島第一砲台、②大島砲台、③白島砲台、④観音崎砲台、⑤蓋井島第二砲台、⑥沖ノ島砲台、⑦角島砲台

各砲台は昭和10年(1935年)から太平洋戦争前の昭和15年(1940年)までに竣工しました。敵艦船、特に潜水艦の脅威を排除し航路の安全を護ることが主任務となり、昭和16年(1941年)7月の準戦備下令で下関要塞重砲兵聯隊の各中隊が砲台に配備されました。この態勢で大東亜戦争に突入しますが、昭和20年(1945年)には本土決戦に備えて火砲を本土に転移、洞窟砲台を構築中に終戦を迎えています。

戦争末期には主な防護対象が北九州の軍関連施設、特に小倉の造兵廠となり、対処目標も海峡を通る艦船から高空の飛行機へと変わり、装備も要塞砲から高射砲へと変わっています。

◆現在の砲台跡の状況

【角島】砲側庫や付属建物が多く残るが殆どが私有地化(一部住居として利用)

【観音崎】門柱等施設跡があり軍道を辿ると砲座や塹壕、掩体が散在

【蓋井島】数多くの遺構が状態よく残る(偽砲あり)

【白島】砲座、兵舎残るが石油備蓄基地のため一般人立入禁止

【沖ノ島】遺構が残っているが島全体が神域で通常は立入禁止(上陸機会はあり)

【大島】観測所、砲座(洞窟砲台)等保存されており状態は良い

▼編集後記▲

名称はそのままでも、明治以降は様相も目的も変わったという印象があります。旧軍の大きな施設があった他の市町と異なり、下関は要塞として独特の形で今日に至ったという感じがします。例によって、内容に関する責任は全て支部長にあり、特に規則等に定めてあるもの以外は私の個人的見解が色濃く反映されていますので、ご意見等ございましたら遠慮なくお知らせ下さい。